

青年期女性の恋愛における自己愛と恋人への依存との関係

—「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」の視点から—

瀬戸加菜恵・丸山 仁美

要 旨

先行研究で、自己愛の高い女性は自己評価を安定させるために他者からの賞賛や注目を求めることが明らかになっている（小塩，2000）ことから、自己愛の高い女性は、自己評価を高く維持したいがゆえに、恋人に対して一体感を強く求め、強く依存すると推測した。また、自己愛傾向が高い女性の恋愛スタイルには、恋人を自己の延長として見なすことで生じる「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」があると考え、2つの依存が同居していると推測した。よって本研究では、青年期の女性を対象とし、恋人との恋愛関係において、自己愛が高い女性の恋愛スタイルに、「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」が同居するか検討することを目的とし、また、2つの依存に恋人との関係満足度や関係重要度の高さが起因しているのかについて検討を行った。その結果、自己愛傾向が高い人の方が「自己愛的な依存」が高く、「相手のことを優先させる依存」においては差がないことが明らかになった。また、「相手のことを優先させる依存」においてのみ関係重要度が促進的な方向へ影響を与えていたことから、同じ恋人に対する依存でも、「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」とでは、恋人との関係重要度を中心とした恋人との関係の質に大きな違いがあることが明らかとなった。

キーワード：青年期女性，自己愛，恋人への依存

I. 問題・目的

異性との恋愛関係において、関係の築き方には個人のパーソナリティが影響する場合がある。高坂（2009）は、恋愛は青年の重大な関心ごとのひとつであり、実際に青年は異性との親密な関係すなわち恋愛関係を築き、様々な心理的・実生活的な影響を受けているとしている。また、詫摩（1986）は「青年期の恋愛はすべて順調に進行するものではなく、様々な出来事があり、それらの体験を通して、その人自身が人間的に成長し、精神的に成熟していくことが大切である」としている。つまり、青年期において、重要な対人関係の場となる異性との親密な恋愛関係には、様々な悩みや葛藤が生じ、よくも悪くも自分自身の性格特徴が顕著に現れる場ではないだろうか。例えば、自分に自信が持てず、自分に対する自己評価が低い女性は、自己愛が低いことから「自分はダメな人間だから、この人がいなくては生きていけない」というように恋人に対してすぎるような依存傾向が見られるかもしれない。しかし、果たして本当に自己愛が低いことが依存傾向につながるのだろうか。自己愛が強く、自分に自信がある女性が、自分を愛することと同じように恋人を愛し「自分がいなくてはこの人はダメになるから何でもしてあげたい」というように

恋人に対して尽くすような依存傾向がみられる場合もあるのではないだろうか。

本研究では、青年期における異性との恋愛関係において、個人のパーソナリティである自己愛と依存が恋愛スタイルにどのような影響を与えているのかについて検討したい。

田中（2009）は、恋人が1人以上いる青年期男女159名（男性68名、女性91名）を対象とし、恋人依存性スタイル（恋人への依存の仕方）、恋人依存性スタイルと関係評価（恋人との関係の評価）との関連について検討を行った。その結果、3つの恋人依存性スタイルが得られた。1つ目の「安定的依存群」は、恋人への依存性が安定的であり、恋人との心理的距離が保たれている群である。2つ目の「依存回避群」は、恋人への依存を拒否する態度である「依存拒否」因子の値が高く、恋人への依存を回避している群である。3つ目の「過剰依存群」は、他の群と比べて、分離不安によって恋人に対して従属的で献身的な態度をとる「不適応的依存様式」因子の値が最も高く、「依存拒否」因子が最も低い群である。また、恋人依存性スタイルと関係評価との関連において、安定的依存群は、恋人との関係の満足度や重要度がもともと高く、依存を拒否せず過度でもない、一般的な依存性を恋人に向けた場合のカップル関係であるとされた。また、依存回避群は、恋人との関係の満足度も重要度も低く、恋人に対して執着していないとされた。一方、過剰依存群は、恋人との関係の満足度も重要度も高く、恋人に対して強く執着しており、恋人との関係に満足し、分離不安から関係を持続したいという欲求が生じるため、関係を重要視しているとされた。

次に自己愛に起因する依存について、稲垣（2004）は、一方的で欲求がましい特徴のある「自己愛的甘え」の検討を行い、「屈折した甘え」「配慮の要求」「許容への過度の期待」が自己愛的甘えの概念であると述べている。「屈折した甘え」とは、甘えたいが甘えが受け入れられないという状況で、不機嫌になったり、敵意をみせたりすることである。「配慮の要求」とは、自分が他者からの特別な配慮を受けるに値すると感じ、配慮がなかったときに不満や怒りを感じやすい傾向にあるということである。また、「許容への過度の期待」とは、自己利益のために、その人の年齢や置かれた状況などからすべきでないことをしたり、すべきことをしなかったりといった不適切な行動を周りに許容されたいと期待することである。これらのことから稲垣（2005）は、自己愛的甘えのある者は、他者から意識されることで自分の存在意義を認められていると感じ、特別にちやほやされることを求めていると述べている。つまり、他者からの意見や評価に依存していると考えられる。また、自己愛的甘えの傾向が過度になった場合、「どんなに不適切な自分でも認められて当然であろう」「自分の不適切さの為に周りに迷惑をかけても許してもらえるだろう」と期待を持つ人は、依存関係において情緒的・社会発達の初期段階にとどまっていると稲垣（2005）は論じている。

では、自己愛は青年期の恋愛にどのような影響を与えているのだろうか。青年期の自己愛傾向は小塩（1998）によると、自分自身への関心の集中と、優越感などの自身に対する肯定的感覚、それを維持したいという強い欲求によって特徴づけられるとされている。小塩（2000）は、異性に対する態度や恋愛関係、恋愛経験に自己愛傾向の高さが関連しているのかについて、大学生、専門学校生383名（男性186名、女性197名）を対象とし研究を行った。その結果、自己愛の高い女性は独占欲が強く、嫉妬深く、相手との一体感を求める恋愛意識を持ち、他者に注目や賞賛されたい欲求と相関関係にあるということが示された。

しかし、小塩（2000）の先行研究では、一般的な異性に対する検討はしているが、恋人に対して依存傾向にあるのかについては検討されていない。恋愛関係には様々な関係があるが、最も密接な関係であると推察される恋人のみを対象とすることで、より親密な恋愛関係における自己愛と依存の関係について検討できると期待できるため、恋人に対する依存傾向を検討する意義があると考えられる。また、小塩（2000）では、自己愛と依存の直接的な検討は行っていないが、小塩（1998）の研究において、自己愛の高い女性は

自己評価を安定させるために他者からの賞賛や注目を求めることが示されている。このことから、自己愛の高い女性は、自己評価を高く維持したい欲求が異性に対する執着へつながると考えられ、恋人に対して一体感を強く求め、強く依存すると推測する。

小此木(1981)は、「自己愛人間」の愛し方や関わり方には、自分に関わる全てのものは良いものであるとみなし、恋人を自己の延長としてみなす「自己愛同一視」が働くとしている。この理論から、自己愛傾向が高い女性の恋愛スタイルには、恋人を自己の延長として見なすことで生じる2つの依存があると推測する。1つ目は、自分自身の嫌いなところを恋人も同じように持っている場合にはそこを認めず、自分の価値観で恋人のことを非難する「自己愛的な依存」である。これも相手を自己の延長として考え、相手のことに執着し、干渉せずにはいられないという意味で依存と言えるだろう。2つ目は、自分を愛することと同じように恋人を愛し、周囲が見てどんなにダメな相手でも自分と似ているところを良い部分であると見なし、恋人のために自分の時間を割いてでも尽くす「相手のことを優先させる依存」である。小塩(1998)は、青年期における自己愛傾向を自分自身への関心と自分自身に対する肯定的感覚、その感覚を維持したいという強い欲求によって特徴づけられるとしている。このことから考えると、自己愛傾向のある女性は自身への肯定的感覚から自分の評価や価値観に自信を持ち、自己愛同一視によって恋人を自己の延長とみなしているため、恋人の似ている部分や共感できるものなど自分が認めたものに対しては、多くの愛情を注ぐことが推測される。「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」の2つは、自分を優先させることと相手を優先させることで両極端のことであるように思われるかもしれない。しかし、自己愛的な人は自己愛同一視によって、恋人を自己の延長としてみなす結果、相手を非難したり、相手に愛情を注いだりすると考えられるため、この2つの依存が同居していると筆者は推測する。

また、先述したように、田中(2009)の恋人依存性スタイル(恋人への依存の仕方)と関係評価(恋人との関係の評価)の関連についての研究結果で、過剰依存群は恋人との関係に満足し、重要視していることから、恋人に対して執着しており、恋人との関係を持続したい欲求が生じることが分かっている。先述したように、筆者は、自己愛傾向のある女性が自身への肯定的感覚から自分の評価や価値観に自信を持ち、自己愛同一視によって恋人を自己の延長とみなし、恋人の似ている部分や共感できるものなど自分が認めたものに対しては多くの愛情を注ぐと推測している。この筆者の推測と田中(2009)の先行研究を考え合わせると、自己愛傾向の高い人は、恋人との関係をより重要視し、また、その恋愛関係に満足していると推測できる。よって、自己愛傾向が高いことと関係を重要視していること、関係に満足していることは、自己愛傾向が高い人の恋人に対する依存であると考えられる「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」に促進的な影響を与えている可能性があるかと推測される。

以上のことから、本研究では、青年期の女性を対象とし、恋人との恋愛関係において、自己愛が高い女性の恋愛スタイルに、「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」が同居しているか検討することを目的とする。また、「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」に恋人との関係満足度や関係重要度の高さが起因しているのかについて検討を行う。なお、本研究では、自己愛の定義を、小塩(1998)の“自分自身への関心の集中と、優越感などの自身に対する肯定的感覚、それを維持したいという強い欲求”であるとする。また、恋愛における依存については、Melody(1992、伊福・徳田2006から引用)の“一人でいることやパートナーがいないことに耐えられず、恋愛関係・親密な友人関係にある異性に過度に執着・依存し、その人のために尽くす、あるいは見捨てられることを恐れ自己犠牲的な行動をとっている状態”と定義し検討を行う。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象

現在恋人のいる青年期女性128名（平均年齢20.07歳， $SD = 1.27$ ）。また，恋人の有無については，調査者が質問紙を手渡しする際に直接尋ねることと合わせて，フェイスシートによって，回答は現在恋人がいる女性に限るという旨の教示を行い確認した。

2. 調査時期と手続き

2015年7月上旬から同年同月中旬にかけて調査者によって質問紙を配布し調査を実施した。

3. 調査内容

- ①自己愛人格目録短縮版（小塩，1999）：自己愛傾向を測定する尺度。「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3因子。回答は全30項目を「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの5件法で測定する。
- ②恋愛依存傾向尺度（伊福・徳田，2008）「独占欲求」因子：「自己愛的な依存」を測定する尺度。全6項目を5件法で測定する。「独占欲求」因子は，「恋人にはいつも自分のことだけを考えていて欲しい」「恋人は自分だけのものであって欲しい」などの項目で構成されており，恋人を独占したいという欲求を意味する因子である。本研究における小此木（1981）の「自己愛同一視」の理論から推測した「自己愛的な依存」は，相手を自己の延長として考え，相手のことに執着し，干渉せずにはいられないという依存である。よって，恋人のことだけを考え，独占したいという共通点から「自己愛的な依存」を測定する尺度として，「独占欲求」因子を用いることとする。
- ③恋愛依存傾向尺度「恋人優先」因子：「相手のことを優先させる依存」を測定する尺度。全8項目を5件法で測定する。「恋人優先」因子は，「体調が悪くても恋人に呼び出されたら駆けつける」「恋人との時間を何よりも優先させ，そのために自分の時間が無くなっても構わない」などの項目で構成されており，自分よりも恋人を優先させることを意味する因子である。本研究における小此木（1981）の「自己愛同一視」の理論から推測された「相手のことを優先させる依存」は，自分のことのように恋人を愛し，恋人のために自分の時間を割いてでも尽くすという依存である。よって，恋人のために自己犠牲的に尽くすという共通点から「相手のことを優先させる依存」を測定する尺度として，「恋人優先」因子を用いることとする。
- ④恋人との関係への評価尺度（金政・大坊，2003）：恋人との関係満足度と関係重要度を測定する尺度。全4項目を7件法で測定する。

Ⅲ. 結 果

自己愛傾向の合計得点において，合計得点の平均値を基準に被験者を高群と低群に分類した。なお，高群は63名，低群は65名であった。

1. 自己愛傾向高群・低群と恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点との関係

自己愛傾向の高群と低群によって恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点に差があるか検討するため、自己愛傾向高群と自己愛傾向低群を独立変数、恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点を従属変数とした対応のない t 検定（両側）を行った。その結果、自己愛傾向高群と自己愛傾向低群の群間に有意な差が見られ、自己愛傾向高群の方が自己愛傾向低群よりも恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点が有意に高かった ($t(126) = 3.01, p < .05$)。自己愛傾向高群・低群における恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子合計得点の平均値は高群17.42 ($SD = 4.63$)、低群14.78 ($SD = 5.27$) であった。

2. 自己愛傾向高群・低群と恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点との関係

自己愛傾向の高群と低群によって恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点に差があるか検討するため、自己愛傾向高群と自己愛傾向低群を独立変数、恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点を従属変数とした対応のない t 検定（両側）を行った。その結果、自己愛傾向高群と自己愛傾向低群の群間に有意な差は見られなかった ($t(126) = 1.43, n.s.$)。自己愛傾向高群・低群における恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子合計得点の平均値は高群20.69 ($SD = 7.10$)、低群19.00 ($SD = 6.29$) であった。

3. 関係満足度得点・関係重要度得点・自己愛傾向得点と恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点との関係

関係満足度得点と関係重要度得点、自己愛傾向得点が恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子得点に影響しているか検討するため、関係満足度得点、関係重要度得点、自己愛傾向得点を説明変数、恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、自己愛傾向得点が恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点を規定しており ($R^2 = .095$)、自己愛傾向得点は、恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点へ促進的な方向に中程度の影響を与えていた ($\beta = .322, p < .001$)。しかし、関係重要度得点と関係満足度得点は、恋人依存傾向「独占欲求」因子の得点に直接的な影響を与えていなかった。

4. 関係満足度得点・関係重要度得点・自己愛傾向得点と恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点との関係

関係満足度得点と関係重要度得点、自己愛傾向得点が恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点に影響しているか検討するため、関係満足度得点、関係重要度得点、自己愛傾向得点を説明変数、恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、関係重要度得点が恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点を規定しており ($R^2 = .107$)、関係重要度得点は、恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子得点へ促進的な方向に中程度の影響を与えていた ($\beta = .327, p < .001$)。しかし、関係満足度得点と自己愛傾向得点は、恋人依存傾向「恋人優先」因子の得点に直接的な影響を与えていなかった。

IV. 考 察

本研究では、「自己愛的な依存」を測定する尺度として、恋愛依存傾向尺度（伊福・徳田，2008）「独占

欲求」因子を用いて調査を行った。小此木（1981）の概念から推測した「自己愛的な依存」と伊福・徳田（2008）「独占欲求」因子は同じ概念ではない。しかし、「自己愛的な依存」も「独占欲求」因子も恋人のことだけを思い、独占したいという点で共通していることから、自己愛傾向高群・低群と恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子得点との関係の結果を用いて、「自己愛的な依存」について考察を行うこととした。また、「相手のことを優先させる依存」を測定する尺度としては、恋愛依存傾向尺度「恋人優先」因子を用いて調査を行った。「恋人優先」因子も同様に、小此木（1981）の概念から推測した「相手のことを優先させる依存」と伊福・徳田（2008）「恋人優先」因子は同じ概念ではない。しかし、「相手のことを優先させる依存」も「恋人優先」因子も恋人のために自己犠牲的に尽くすという点で共通していることから自己愛傾向高群・低群と恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子得点との関係の結果を用いて、「相手のことを優先させる依存」について考察を行うこととした。

1. 自己愛傾向と「自己愛的な依存」との関係

自己愛傾向の高群と低群によって恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の得点に差があるか検討した結果、自己愛傾向が高い人の方が低い人よりも有意に「独占欲求」因子が高いことが明らかになった。松並（2013）は、自己を価値のあるものと心から思えた場合は、その表れ方は自尊感情などと同様の適応的なものとなっている。また、自己評価が下がりそうな場合には、自己を価値あるものと思えなくなならないよう、他者からの賞賛を得ようと必死になったり、自己の価値を上げるために他者を利用したりするのではないかと述べている。Fromm（1939、松並2013から引用）は、自己愛者の互いに密接に結びついている愛の現象の一つとして、「対象を呑み込んで、自分の意のままにできる意思のない道具にしてしまいたいという欲望から生まれるもの」を他虐的愛であると指摘している。また、これは、不安と依存心から生じる衝動であり、自己愛者は相手に対する支配権を確定させることによって、強さと安心感を得ることができると述べている。これらの先行研究と本研究の結果を合わせて考えると、自己愛傾向の高い人は、自己評価を安定させるために他者からの賞賛や注目を求め、自己評価を高く維持したいという欲求が、安心感を得るために、恋人を自分自身の一部として捉え、自分だけのものとして扱いたいという執着心へとつながっている可能性があると考えられる。また、そのことによって、恋人への「自己愛的な依存」として表れたと考えられる。この結果は、本研究で自己愛傾向の高い人の恋愛スタイルとして推測していた小此木（1981）の自己愛同一視の観点からも考えることができ、自己愛傾向が高い人における、恋愛相手を自己の延長として見なし、恋人のことに執着し、干渉せずにはいられないという「自己愛的な依存」の特徴が表れたのではないかと考えられる。

小塩（2000）によると、自己愛傾向の高い青年は、恋愛相手に夢中になったり、恋愛相手を理想化したりする恋愛スタイルであると述べられている。このことから考えると、自己愛の高い女性の「自己愛的な依存」には、メールの返信が遅いと不安になり何度もしつこく催促したり、相手の迷惑を考えずに頻繁に会いに行ったりというような恋愛相手に夢中のあまり度が過ぎてしまうものがあるのではないかと推察される。また、このように、恋人を理想化したり過度に執着したりして自分のものであるかのように独占する行動は、恋人支配行動といえるのではないだろうか。片岡・園田（2014）は、恋愛のイメージや影響に関する調査研究の中で「恋愛をしていると相手のいろいろなところに干渉したくなる」といった「独占・束縛」因子が見出されている（金政、2003）ことから、このように恋人を独占することを自分の愛情欲求を満たすために相手の行動を制限する行為であると述べている。また、恋人の行動を制限する行為を「恋

人支配行動」と定義し研究を行っている。この先行研究の中で、片岡・園田（2014）は、恋人支配行動の中には恋人を押しやりつかんだり、つねったりするといった恋人への暴力的な行為をあらわす「暴力的支配行動」と恋人の携帯を見て異性のアドレスを消してもらうといった恋人を束縛する行為をあらわす「束縛的支配行動」の2つがあると述べている。本研究では、自己愛傾向の高い人の「自己愛的な依存」における恋人支配行動について直接的な検討は行っていない。しかし、恋人支配行動のうち束縛的支配行動の「メールを返すことを強制する」や「自分よりも友人を優先すると怒る」といった質問項目が、本研究において、「自己愛的な依存」を測定するために用いた恋人依存傾向尺度「独占欲求」因子の「恋人が自分以外の人と話したり、出かけたりするのは許せない」や「恋人の行動や持ち物などを、逐一知っていないと不安になる」といった質問項目と、恋人を束縛しているという点で共通している。よって、自己愛傾向の高い人は、自分の愛情欲求を満たすために恋人を独占するといった恋人支配行動を行うのではないかと筆者は考察する。この「自己愛的な依存」と恋人支配行動は、恋人を束縛して、恋人に執着し干渉するといった共通点もあるが、いくつか相違点もある。例えば、片岡・園田（2014）によると、束縛的支配行動は“恋人と離れたくない”という恋人に対する強い分離不安と長い交際期間という条件がそろい、関係性が進展していく中で生じるとされている。それに対し、「自己愛的な依存」の束縛的行動は恋人を自己の延長として捉え、自分だけのものとして独占したいために生じるとされている。また、暴力的支配行動は、弱い分離不安と強いコミットメント、つまり、強い愛情によって積極的に関わろうとしている状態の時に生じやすく、分離不安が強いほど低減するとされている（園田・片岡，2014）。一方で、「自己愛的な依存」には、恋人に執着し干渉するといった恋人支配行動も起きてはいるが、「自己愛的な依存」は恋人に対する強い愛情から生じているのではないと考えられる。「自己愛的な依存」は、自己評価を下げうるような脅威状況において、自己評価を維持しようとし生じるものであり、自己愛同一視によって、恋人を自己の一部としてとらえ、自分の価値観で恋人を非難することであるという点で違いがある。これらのことから、自己愛傾向の高い人の「自己愛的な依存」には、恋人の行動を制限する恋人支配行動が見られるが、その表れ方には「自己愛的な依存」特有の自己愛同一視のメカニズムがあるのではないかと筆者は考察する。

2. 自己愛傾向と「相手のことを優先させる依存」との関係

自己愛傾向の高群と低群によって恋人依存傾向尺度「恋人優先」因子の得点に差があるかを検討した結果、自己愛傾向の高い人と低い人とでは「恋人優先」因子に差がないという結果になった。つまり、自己愛傾向の高い人に「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」の2つの依存は同居していないことが明らかになった。では、どうして、「自己愛的な依存」においては自己愛傾向の高・低群に有意な差が見られたにもかかわらず、「相手のことを優先させる依存」においては、自己愛傾向の高・低群に有意な差が見られなかったのだろうか。

小塩（2000）は、自分が自分を愛することと意味が近いとされる「優越感・有能感」の高さと恋愛を至上のものとする恋愛意識の高さが関係していることを明らかにしている。この結果から、自分が自分を愛することと異性を愛することが必ずしも排他的な関係にあるわけではないと述べている。しかし、小塩（2000）は、そこには、相手から愛されるという報酬が関与しているかもしれないとも述べている。また、相手から愛されるということは、その相手から肯定的な評価を受け取る機会に恵まれていることであると考える、このことが、自分が自分を愛することと意味が近いとされる「優越感・有能感」を高めることとなり、同時に、維持していると論じている。この先行研究から本研究の結果を考えると、自己愛傾向の高い

人は、自分と恋人との間に、恋人から愛されることで得ることのできる肯定的な評価という報酬が生じており、自己愛傾向の高い人と恋人との関係は、その報酬を恋人から得るために恋人を愛するという利益と報酬を交換する関係になっているのではないかと筆者は考察する。また、小塩(2000)の研究において、恋人がいることでこの肯定的な評価を受ける機会に恵まれるということが分かっていることから、より多くの肯定的な評価という報酬を得ることができるようにするため、恋人を優先させる度合いも一層強いものになると考える。つまり、本研究において、「相手のことを優先させる依存」に自己愛傾向の高さが関係していなかったのは、自己愛傾向の高い人の恋愛スタイルに、自分と恋人との一体感というものがないからであると考えられる。また、自分と恋人との間に存在しているのは、恋人から愛されることで得られる肯定的な評価という報酬であったため、恋人からその肯定的な評価という報酬を得ることを目的とし、恋人を愛しているからだと考察する。

3. 恋人への依存と恋人との関係満足度・重要度について

「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」に、関係満足度得点と関係重要度得点、自己愛傾向得点のうち、どの要因が影響を与えているのか検討した結果、「自己愛的な依存」については、自己愛傾向得点が促進的な方向へ中程度の影響を与えており、「相手のことを優先させる依存」については、関係重要度得点が促進的な方向へ中程度の影響を与えていることが明らかになった。では一体、どうして「自己愛的な依存」に、関係満足度も関係重要度も影響を与えなかったのだろうか、また、「相手のことを優先させる依存」に、何故、関係重要度だけ中程度の影響を与えたのだろうか。

まず、「自己愛的な依存」について、自己愛傾向得点が促進的な方向に影響を与える要因であった結果について考察する。これはつまり、自己愛傾向が「自己愛的な依存」を説明する要因の一つであるかもしれないということであり、本研究で推測した通り、自己愛傾向の高い人は、「自己愛的な依存」を行う可能性があると考えられる。

次に、「自己愛的な依存」の要因に恋人への関係満足度と恋人への関係重要度が影響を与えていなかったことについて考察する。本研究で使用した恋人との関係への評価尺度は、現在付き合っている恋人との関係を評価させるものであり、対象を今現在の恋人に限定したものであった。前述したように、自己愛傾向の高い人の「自己愛的な依存」は、小此木(1981)の自己愛同一視の観点から、恋人を自己の延長として見なし、恋人のことに執着し、干渉せずにはいられないという特徴を持っていると考えられる。また、自己愛傾向の高い人は、自分の自己評価を高めるためにも維持するためにも恋人の存在が必要であり、恋人から愛されることで得ることのできる肯定的な評価が大事であると推察された。つまり、「自己愛的な依存」を行う自己愛傾向が高い人は、肯定的な評価を受けることによって自己評価を高めるという満足のために恋人を愛していると考えることができる。あくまで恋人というのは自己の延長の一部であって、恋人が必ずしもその相手でなくてはならないというわけではないのかもしれない。また、現在の恋人との関係に満足しているか、恋人との関係を重要視しているかは「自己愛的な依存」を行う人にとって、とりたてて大事なことではなく、恋人が自分の思い描いた通りにしてくれる人であつたら良いと考えているのではないだろうか。そのため、関係満足度も関係重要度も「自己愛的な依存」に影響がないという結果になったのではないかと考察する。小塩(1998)は、特定の相手と接するよりも多くの人と接する方が肯定的感覚を維持しやすく自己愛の高さにもつながると述べている。つまり、「自己愛的な依存」を行う自己愛傾向が高い人にとって、現在の恋人との特定の対人関係における関係満足度や関係重要度は、自身の自己評価

を維持するために必要な関係の一つにすぎないため、「自己愛的な依存」に恋人との関係満足度も関係重要度も影響がないという結果になったと筆者は考察する。

次に、「相手のことを優先させる依存」に関係重要度得点だけ中程度の影響を与えたことについて考察する。杉浦・玉井・杉浦（2015）によると、「相手のことを優先させる依存」を測定するために用いた「恋人優先」因子は、相手からの頼まれごとなどに自身の時間や生活などを犠牲にして応じ、自身よりも恋人を優先することであるとしている。また、恋人に嫌われたり、恋人が離れていくことに不安を抱くため、自身のことよりも恋人を最優先し過度の時間や関心を与えることで、関係維持に努めたり恋人を繋ぎ止めようとする述べている。さらに、恋人が離れていくことや見捨てられることに強い不安を持ち、他者に受容されることで自身の幸福感を得る人は、恋人に強く依存し、自身よりも恋人を優先することで恋人との関係を親密にしようとしていると述べている。また、恋人に受容されることで幸福感を持つため、恋人に受容してもらおうと自己犠牲的に応じる傾向があると論じている。この先行研究から、「相手のことを優先させる依存」を行う人は、現在の恋人との関係を重要視しており、そのため、恋人に対して自己犠牲的に尽くしている可能性があるとして筆者は考察する。杉浦・玉井・杉浦（2015）によると、「自己愛的な依存」を測定するために用いた「独占欲求」因子は、恋人を自分だけのものにしたいという依存であり、「恋人優先」因子は、恋人を優先することで相手に自分を独占してほしいという依存であると述べている。また、自身と恋人との間で、誰が独占するのか独占されるのかという方向の違いがあるものの、どちらも独占したい、自分のものにしたいという傾向があると述べている。先述したように、「自己愛的な依存」を行う人は、現在の恋人との関係における関係満足度や関係重要度を特に大事だと考えていないと推測される。これに対し、「相手のことを優先させる依存」を行う人は、現在の恋人との関係を重要視しており、そのため、恋人に対して自己犠牲的に尽くしていると考えられる。このことから、同じ恋人に対する依存でも、「自己愛的な依存」と「相手のことを優先させる依存」とでは、恋人との関係重要度を中心とした恋人との関係の質に大きな違いがあるのではないかと推察される。

引用文献

- 伊福麻紀・徳田智代（2006）. 恋愛依存傾向尺度作成の試み—男女間における恋愛依存傾向の比較— 久留米大学心理学研究, 5, 157-162.
- 伊福麻紀・徳田智代（2008）. 青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討 久留米大学心理学研究, 7, 61-68.
- 稲垣実果（2004）. 日本の自己愛尺度の作成に関する研究 日本心理学会第68回大会発表論文集, 68.
- 稲垣実果（2005）. 自己愛的甘えに関する論理的考察 神戸大学発達科学部研究紀要, 13, 1-10.
- 高坂康雅（2009）. 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連 パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 金政真司・大坊郁夫（2003）. 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19, 59-76.
- 片岡祥・園田直子（2014）. 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 13, 13-28.
- 松並知子（2013）. 自己愛に関する研究の概観—ナルシズムとセルフラブ, および、質的な性差に焦点を当てて— 四天王寺大学紀要, 56, 1-21.
- 小塩真司（1998）. 自己愛傾向に関する研究—性役割観との関連— 名古屋大学教育部紀要, 45, 45-53.
- 小塩真司（1999）. 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.

- 小塩真司 (2000). 青年期の自己愛傾向と異性関係—異性に対する態度, 恋愛関係, 恋愛経験に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 47, 103-116.
- 小此木啓吾 (1981). 『自己愛人間』 朝日出版
- 杉浦浩子・玉井千晴・杉浦春雄 (2015). 大学生の愛着スタイルの違いが恋愛依存傾向に及ぼす影響 健康レクリエーション研究, 11, 13-20.
- 鈴木乙史・詫摩武俊 (1986). 『パッケージ・性格の心理』 ブレーン出版
- 田中純 (2009). 青年期後期の恋人への依存性に関する研究—恋人との関係評価及び依存対象との関連から— 九州大学心理学研究, 10, 139-147.

(せと かなえ 長崎純心大学大学院人間文化研究科博士前期課程)

(まるやま ひとみ 長崎純心大学人文学部人間心理学科)